



第3回CMA受賞者 エッセイ作品集

第3回CMAを受賞した方たちが本エントリー時に作成したエッセイです。
エッセイ作成の参考にしてください。

第3回CMAにおけるエッセイ作成内容は次の通りです。**第4回の内容と一部異なっていますのでご注意ください。**

◆個人部門テーマ

本選でプレゼンする探究学習について、探究に至る背景・探究の目的・探究の実績、世界をどう変えるかの4点を説明してください。

◆チーム部門テーマ

本選でプレゼンする探究学習について、探究の目的、探究の実績、世界をどう変えるかの3点を説明してください。また、何故チームとして探究を行い本大会へ参加するのかを説明してください。

一般社団法人英語4技能・探究学習推進協会
CMA実行委員会

金賞受賞：足立学園高等学校（東京都） 八幡昂樹さん

タイトル：Building a Self-Driving Car

車の運転をくつろげる環境に変えたい。運転は常に集中していないといけないのでストレスフルである。ドライバーがハンドルを握りながらイライラして独り言を呟いているのを誰もが聞いたことがあるはずだ。なんとか車の旅をくつろいだものに変えられることはできないのか。

ある日、Youtubeでメルセデスベンツの自動運転車の試運転の動画を観た。運転手は完全にハンドルから手を離して景色を楽しんでいた。その瞬間、自動運転車を自分の手で実現するというはっきりとした目標ができた。

私は以前からプログラミングが大好きで画像認識やDeep LearningなどAIに関係することを独学していたこともあり、自動運転技術というAI分野の最先端の技術について勉強するのは楽しくてたまらなかった。私の学校では一年かけて探究活動をする授業があり、その活動を通してこのテーマを探究している。

自動運転技術を実現するときに何が必要なのかということをインターネットや本で調べ、実際にドライブレコーダーの動画から道路のレーンを認識するコードを組むことができた。さらに、道路標識の意味を理解する画像認識技術をプログラムした。最後に、これをラジコンで具体化させようとしている。簡単にいうと、ラジコンの上に小さいコンピュータを載せて、その上で自分が書いたプログラムを実行し、ラジコンを自動で走らせる。

ラジコンとの作業は想像以上に大変である。現に今、自分が作ったプログラムとラジコンを連動させることに2ヶ月以上試行錯誤している。しかし、この問題を乗り越えた先には夢にまで見ていた自動運転技術を自分の手で具体化していることを想像すると楽しめずにはいられない。この探究活動を通して作成するミニチュア自動運転車を発展させ、実際の車でその技術を活用してきたいと思っている。自動運転技術が完成すれば、車の中はくつろげるスペースと変貌するだろう。

銀賞受賞：京都市立紫野高等学校（京都府） 大幸宙斗さん

タイトル：Makeup Lets You Glow

「有害な男らしさ」に対する考察

私の研究活動の目的は、普段話題にされることが少ない「有害な男らしさ」に焦点を当て、本質的なジェンダーレスな社会の形成の気づきを生み出すことです。

男性は男女平等社会の敵でしょうか。メディアが発信する情報で女性は社会で虐げられてきた存在で、男性がそれを創り出してきたように伝えられますが、男性もその制度に苦しむ被害者です。

私の研究の背景は、近年女性の社会地位向上のため男女平等というポリシーがよく使用されますが、そのような運動には女性のサポートは含まれていても「有害な男らしさ」には言及しないことがほとんどだと感じたからです。

研究活動において、85人(10代－20代、男28人、女55人、その他2人/2020年11月実施/)へアンケートを実施した結果、20%の男性が男らしさの押し付け（男は泣くな、男なら行け、食事の支払いは当然）に苦しんでいるということが分かりました。それに対して65%の男性が弱さを見せるのを躊躇うという結果になりました。このように、男性にはタフで責任感があるイメージが残り、助けを求められずにいます。

このアンケート調査結果からさらに研究を進め、今、私はSNSとジェンダーフリーのメイクを利用してそうした男性が「助けを求める場所」と「男らしさを打ち消すフォーマット」を作っています。

私はメイクで男女ともに自身の良さや、コンプレックスでさえも活かせると信じています。実際に、私はインスタグラムを通し、1000人以上いる世界中のフォロワーに自分のメイクを発信し、「男性の美しさ」を届け、もっと多くの人々がジェンダーレスなメイクを共有できる場を作る為活動しています。

この研究は、誰の自分らしさもかき消されない社会をつくると私は信じています。そして、ジェンダーという殻を自らの個性という名の武器で壊し、それぞれが「らしさ」に囚われず、多様性と共に自分なりの人生を歩む未来を生み出すでしょう。

銀賞受賞：栃木県立矢板東高等学校（栃木県） 小野萌菜さん

タイトル：To save the imperfect vegetables

規格外農産物の販売企業の経営

1. テーマ変更の理由

私は将来、世界中の農産物を国境を超えて様々な国で販売する企業を起こしたいと考えており、環境保全や資源の有効活用が注目されている現状も考慮し、規格外農産物を主力商品として販売する企業について研究しようと考えた。

2. 研究の目的と研究の実績

この研究の目的は、規格外の農産物の販売のみで十分な利益を上げることのできる企業を作り運営することができるのか否かを解き明かすことだ。この研究で私は規格外農産物を飲食店相手に販売する事で規格外農産物だけでも十分な利益を上げることができると仮説を立てた。そしてそのためには規格外農産物を飲食店に直接販売する事が最適であると考え、農業協同組合や商工会の皆様のご協力のもとこれまで数件の飲食店の方々にアンケートを実施してきた。しかし、より現実的な結果を出すには今以上に沢山の飲食店の方々に協力していただきより多くのデータを集めることが必要だと私は考えている。そこでcmaへの出場を機により多くの飲食店の方々に私の研究を知ってもらい協力していただけたら良いと考えている。

4. 研究が世界をどう変えるのか

多くの農家が規格外の農産物を少なからず処分しているという現状から、私はこの研究でSDGsのゴールの一つでもあるフードロスを減らすことに貢献できると考えている。また、農業生産者にとってもこれまで販売していなかった規格外農産物が主力商品となる事で、生産量を変えずとも今までより収入を増やすことができるというメリットがある。さらに、この研究は日本で生産した規格外農産物を日本で販売することを前提としている。しかし、この計画が国内で実現できれば後に発展途上国を中心とする海外での規格外農産物の販売にもつながる可能性がある。そうなれば生産した農産物をより余す事なくお金に変えることができるので発展途上国の自力発展に貢献することもできる。

銅賞受賞：桜蔭中学校（東京都） 中辻知代さん

タイトル：ORIGAMI Chair

私の趣味は折り紙です。私はこの趣味を社会に役立てたいと思い、origamiについて調べてみることにしました。今ではOrigamiは日本だけでなく国際的に幅広い分野で扱われていて、飛行機やロケット、医療などの技術面、逆に老化防止、リハビリ医療、などにも使われていることがわかりました。私は折り紙を通じて、環境問題に取り組む方法を考えました。

現代の折り紙の技術では、平面から立体、立体から平面という二通りの活かし方があります。まず、平面から立体にした身近な折り紙として七夕飾りがあげられます。七夕飾りはハニカムボールと呼ばれていて、Honeycombとは蜂の巣を意味します。そして蜂の巣のような六角形や、その他同一の立体図形を隙間なく並べた構造体をハニカムコアと呼んでいます。この構造は高強度、衝撃吸収性が高い、整流作用や断熱性能があるなど、優れた性質をもっているため、身近なものとしては段ボールに使われています。さらにハニカムコアは単一素材と比べると軽量化されるので例えば、アルミはハニカムコアを利用することで約15%も軽くなります。

立体から平面にする方法を使ったものとしては折り畳みドレス、缶酎ハイの缶などがあります。私は立体から平面、平面から立体にできるという折り紙の特徴を生かして、ハニカムコアを利用したいすや机を紙や発泡スチロールで作りました。二枚の方眼用紙では31.4kg耐えましたが、ハニカムコアの椅子で実際にどれ位の重さまで耐えるか実験してみたところ、合計で14枚の方眼用紙とのりだけで作った重さ693gの椅子が100.6kgも耐えました。軽くするために、発泡スチロールでも同様に試してみた結果、175gでなんと75.5kg耐えることができました。

この柔らかくて軽い一枚の紙が、折り紙の工程を経て、パッと台座や椅子、机などの家具に変身、元に戻せば収納も簡単—こんな便利で生分解性のある家具は、環境問題が深刻になると予想される将来、さらに普及していくと思います。

銅賞受賞：頌栄女子学院高等学校（東京都） 船越杏珠さん

タイトル：Gender Equality

私は幼稚園の時から性差を感じてきました。私のクラスの子が風邪を引けば、幼稚園の先生は必ずといっていいほど母親をお迎えに呼んでいるのをみて、私はなぜ先生達は父親を呼ばないのかと疑問に思いました。中学生になってからはフェミニズムという言葉を知り、男女のみならず、虹色の社会のあり方を探求してきました。私の探求の目的は、性別による偏見がなくなり、その人の能力を性別によって決める社会がなくなるようにすることです。そこで私は勇気を振り絞り、WAN代表の上野千鶴子先生にメールを送りました。当初、私はFGMや児童婚など海外の問題に貢献したいと先生にお伝えし、それに対して先生が下さった言葉は「最初は自分の周りから。家族でジェンダーアイデンティティについて話す？そして日本の国はどう？」。この助言を頂いてから私は家族や友達とジェンダーについて話し合うようになりました。話し合っただけで私が気づいたことはジェンダー偏見はまだ日常に存在するという事です。私が家族から実際に耳にした偏見は「バレエは女の子の習い事、野球は男の子の習い事」ということです。そこで私は自分にできることを考え、家族にそんなことはないんだということを説明しました。

「男は強くあるべきだ」という偏見がまだ存在する中、私は自分に出来る限り家族内からその偏見をなくそうと尽力し、偶然にもその時学校でもプレゼンテーションがあったため次の日本を担うクラスメートにもまた国内の性差について発表しました。すると、翌日周りから社会の見方が変わって、お手洗いなどの公共の場でも疑問に思うことが増えたというコメントを多数もらいました。少しずつではありますがジェンダー偏見を周りになくしているのではないかと思います。今後、大人になっても発信し続け、いつか性別という概念がなくなるほどカラフルな社会になれるのではないかと願っています。

銅賞受賞：久留米大学附設高等学校（福岡県） 宮崎莉子さん

タイトル：Soy Sauce and Music

私の中学では3年生で卒業論文を書く。私は、「音楽を聴かせて作った食品は美味しくなる」という噂について、興味を持っていた醤油を使い「醤油醸造と音楽振動の関わり」を検証した。結果、振動は醤油を作る微生物に何か影響を与えていると分かった。この結果を活かして具体的にどのような音楽振動が最適かを知りたいと思い、現在も研究を行っている。

まず、継続した振動と断続的な振動のどちらがよいかを調べることにし、2種の実験を行った。一つ目は寒天培地を使った実験だ。まず、醤油を作る3種の微生物のうち酵母を、一方は24時間、他方は午前と午後に3時間ずつ振動を与えて発酵させる。できた元種を水に溶かして培地に塗布し、出たコロニーの数から活動の活発さの差を観察した。二つ目は醤油を作ることである。味の変化を調べる為に、キットを使い、継続的に振動を付与したものと、断続的に付与した醤油を作った。現在、味の差を科学的に示す為に成分分析を依頼している。

培地を使った実験では、断続的な振動を付与した酵母は、継続して付与したものよりも活動が活発だと分かった。また、醤油作りでは、継続的でも断続的でも、振動を付与するとしらない時よりも発酵が早く活発になった。これは一定時間振動を付与すると醤油醸造に良い影響があることを示唆している。成分分析でも、振動により微生物の活動が活発になった結果が現れるはずだ。

この研究が世界を大きく変えることはないかもしれない。しかし、人の世界観を変えることはできると思う。私がしていることは、一見荒唐無稽なテーマでも研究できるという例だと思う。そして、私の研究を知った誰かが何かしようと思うならば、私はその人のChange Makerだと思う。

今回の結果を踏まえ、次はクラシックとロックのように音楽の種類を変え、微生物に最適な振動を探りたい。どんな音楽をどの位聴かせるのが微生物にとって最適かを証明する為に、研究を続けていきたい。

The Japan Times Alpha賞（スポンサー賞）：吉祥女子中学高等学校 小張陽葉さん

タイトル：Utilization of AI in Employment of People with Disabilities

2016年7月26日に起きた相模原障害者施設殺傷事件を覚えているだろうか。当時私は、この事件自体よりも「障害者は生産性のないから生きる価値がない」という優生思想が未だにこの国に存在していることに衝撃を受けた。これをきっかけに、同じ人間であるはずなのに障害者が「社会的弱者」と言われてしまう日本社会を見直し、正しい社会のあり方とは何かを考えるようになった。また、Siriなどの音声認識機能が開発されたことで、視覚障害を持っている人がより生活しやすくなったことを知り、AIなどの最先端技術が障害者の雇用問題を解決するのに何か役に立たないかと思い、「障害者雇用におけるAIの活用」をテーマに研究するに至った。

2019年に民間企業の障害者の法定雇用率が2.0%から2.2%に引き上げられ、各企業障害者を採用する努力をしているが、それでもなお、働きたくても働けなかったり、働けたとしてもすぐ退職してしまったりする障害者は多い。その原因の一つに、社内で障害についての理解が得られないことがあげられる（※）。したがって、この障害者雇用問題への解決策として、社内での障害に関する理解を深めることを本研究の目標とする。

目標達成へのアプローチとして、以下のことを取り組んだ。①障害者雇用の実態を知るため、障害者雇用支援をしている区役所の職員の方に話を伺う。②実際にAIを利用して障害者をサポートしている株式会社アクセンチュアの社員の方々にインタビュー取材をする。③障害者の就労サポートをするAI搭載のアプリを研究

私が提案するアプリは主に3つの特徴をもつ。一つ目は、障害者と健常者の交流のためのコミュニケーションツールであること。二つ目は、社員の精神ケアのための役割であること。三つ目は、社員が会社に対して求める支援やニーズの受け皿になること。

私がこのアプリの提案を通して実現したいchangeは、障害者雇用問題を解決し、現在の社会が誰でも平等に働きやすくなることである。

金賞受賞：ユナイテッド・ワールド・カレッジ|SAKジャパン

チーム UWC ISAK JAPAN（本田純平さん、小泉威一郎さん、久我優衣奈さん）

タイトル：Korea Japan Youth Conference

ある日、韓国からきた同級生と歴史についてディスカッションする機会がありました。お互いに学校で教わってた歴史が違うので、全く話がかみ合いませんでした。韓国では、日本の侵略について何十ページも教科書を割いているのに対し、日本ではほんの数ページのみです。しかも、双方とも自分が正しいと信じ込んでいるので、どうにも議論が進まないわけです。

私たちは、暗記中心の教育を受けてきた日本と韓国の中高生に、歴史対話を通じて自ら考える機会を提供するという探究学習を行ってきました。日本と韓国の間には多くの問題がありますが、私たちはその理由が暗記中心の教育制度にあるのではないかと考えました。近年取り上げられることの多い歴史問題を例に見てみても、国定歴史教科書の知識を疑うことなく、そのまま頭に詰め込み、異なる視点を理解できないことが、問題の根本にあるのだと思います。自ら考える力の欠如が、現在の様々な問題につながっているのです。

そこで、全く異なる教育を受けてきた日韓の中高生が、歴史についてのディスカッションをしたら面白いことが起こる、と思い立ち、実際にオンラインで日韓両国から20人の中高生を集め、歴史対話を行いました。史上初の日本と韓国の中高生が率直に歴史問題を議論できる場になったと思います。そこでは、歴史問題を話し合うだけでなく、歴史知識に妥当性はあるのか、ということを共に考えました。ここに集まった中高生たちは、自主的に学び続ける、未来のリーダーとなることでしょう。

生粋の日本人・韓国人、帰国子女。私たちのチームは多様性であふれており、日々ディスカッションをしながら、活動しています。皆、全寮制で同じ屋根の下で学んでいるだけに、些細なことも納得がいくまで話し合います。

今回のプレゼンでは、私たちの情熱を多くの人と共有できることを楽しみにしています。

銀賞受賞：東京学芸大学付属国際中等教育学校

チーム KMA（富田雄一郎さん、武重あかりさん）

タイトル：Curing Adolescents' Internet Addiction With Danish Lifestyle

【目的】

この探究の目的はインターネット依存の怖さや急速な広がりを示し、多くの人が実践できる新しい解決策を検証・提案することだ。

【実績】

ネット依存は睡眠障害や不登校、無気力、うつ状態などをもたらす危険な依存症だ。私たちは、ネット依存の広まりを知るため、厚労省と同じ手法で学校の生徒約600人を調査した。結果、約67%が依存者かその予備軍に該当すると知り、この問題が身近に迫っていることを認識した。

私たちは先行研究からネット依存の仕組みを2つ見出した。1つは刺激のスパイラル。SNSやゲームの視覚や聴覚の刺激で快楽を覚えた利用者が、さらなる刺激を求めていくこと。もう1つはストレスのスパイラル。生活ストレスを和らげるためにネットに没頭し学習や仕事がこなせなくなり、さらにネットに逃避することだ。

これらを断ち切るヒントがデンマークの習慣「ヒュッグ」にあると推測できた。ヒュッグは心地よい時間を家族や友人と意識的に共有する習慣だ。例えば、家族や友人とお茶やゲームを楽しむことがある。

ヒュッグで注目すべきは、バーチャルではなく、リアルの世界で人との絆を育むことだ。そこには人を虜にする視覚や音声の過度な刺激はない。さらに生活のストレスを和らげて精神の健康を保ってくれる。

ヒュッグの効果を検証するため、私たちはある実験を行った。中高生たちに一定期間ヒュッグを取り入れた生活をしてもらい、その前後で依存度の変化を検証した。すると全員に有意な効果が認められた。

【世界をどう変えるか】

この探求によってネット依存の怖さや身近さと同時に、それを回避する方法を示すことができる。社会全体がネット依存を克服する契機としたい。

銀賞受賞：郁文館高等学校

チーム TSG（崔博茜さん、菅原みゆさん）

タイトル：Real internationalization

私達は『留学生の不安を少しでも減らすために、私たちができることはなにか』ということテーマとし、探求しています。チームの崔さんが中国人で日本に来たばかりの中学校の頃に孤立し、とても不安だったという経験がありそれを『今後そのような思いをする留学生を減らしたい』と2人で考え、今回この大会に参加しました。私達はこの問題を解決するであろう解決策を考えました。それは日本人の高校生ボランティアによるオンライン相談です。私達は留学生がいつでも日本の学生に相談できるようにし、留学生の不安をなくそうというボランティア活動を企画しました。これは、公式LINEのチャットやzoomなどを活用し、気軽に同世代の日本の学生に、匿名で質問や相談をできる仕組みです。日本語だけでなく英語や中国語を話せる学生も募集し、日本語が通じることが不安な留学生にも対応できるようにしました。「日本で今流行りの言葉を知りたい」、「学校の先生の日本語がわからなかったから英語が話せる学生に英検の申し込み方を教えてもらいたい」など、このような質問・相談は同世代の日本人の学生だからこそ解決できることだと思います。今のところ同じ郁文館高等学校から7名のボランティアの生徒が集まってくれました。その生徒には留学生の相談にのる前に講座や面接のようなものを受けさせ、合格した生徒のみにこの企画に参加してもらおうと考えています。参加して下さる留学生が多くなればもっとボランティアの生徒を増やす予定です。一度このオンライン相談を活用して下さった留学生の方は大変満足してくれました。また、その留学生の方はこの活動を必要としている留学生はたくさんいると思うとおっしゃってくれました。そこでこの活動をもっと広めるため、東京都より留学生の多い千葉の千葉国際交流センターや、日本語教室の未来塾、LVC（NP0法人外国語ボランティア・コートーク）などたくさんの方々に協力していただくことになりました。今後この活動が発展すれば、世界は誰でも住みやすい多様性を尊重する本当の国際化の社会づくりにつながると思います。

銅賞受賞：三田国際学園高等学校

チーム co:post (根津はる香さん、野口璃羅さん、花輪さくらさん、ネーソン萌桃子さん)

タイトル：Wide Potentials of Waste

21世紀の今、大量のゴミが問題になっている。なんと日本ではゴミ焼却場数は世界一。また平成30年度におけるごみ総排出量は4,272万トンで、世界4位のゴミの量である。この現状に危機感を感じ、少しでも世界に貢献できるよう、学校のゴミを減らすための計画を始めた。

このプロジェクトの目的は、学校のゴミを3割削減する為に生ゴミ・落ち葉などのゴミをダンボールに入れ、堆肥化するものだ。堆肥化とは有機物を微生物の働きを活用して栄養豊富な土を作ることである。

また私たちは学校内にとどまらず、飲食店のゴミからも堆肥化をし、畑に提供するという規模の大きいプロジェクトの実行も進めている。ここではゴミの削減による環境保護だけではなく、畑に土を提供するという社会貢献にも繋がってくる。

このように様々な分野を網羅する計画を始めるきっかけとなったのは私たちチーム4人が別々のことに関心があったからだ。野口璃羅は地球温暖化について、花輪さくらとネーソン桃萌子はエコについて関心があった。根津はる香は夏休みの研究で土についてプレゼンを作ったほど植物の再循環について関心があった。そしてこの4人がCMAに出場するという共通の目標を持っていたからこそ始まったプロジェクトである。ゆえに他の大会ではなくCMAに出ることに意義があるのだ。

しかしこの計画はただ堆肥化を普及させることを目的としているわけではない。あらゆる資源を最後まで有効活用できるような意識を世界中に広めることが最大の目的である。その第一歩としてまずこの計画で日本の意識を変える。私たちのアクションをこの大会やSNS媒体を通してゴミ問題の現状を知ってもらう。そして少しずつ考えるだけではなく行動をしてゆくことにより海外全体にも刺激になるだろう。世界中の一人一人が資源を大切に扱い、最後まで責任を持って使う世界を実現したい。

銅賞受賞：福井県立福井商業高等学校

チーム KN3（鍋嶋月音さん、神戸秀太さん、西口旺成さん、根谷梨々子さん）

タイトル：Someone Is Crying Because of Your Message

早速、一年の内にどのくらいの虐めが日本の学校でおこっているか想像できますか？私たちのグループは、これを調査しました。しかし、出された結果は確認された件であり、実際には、調査の結果のおよそ2倍もの虐めが起こっているといわれています。これは日本の状況がとても深刻だと示しています。また、日本とヨーロッパの虐めを比較してみると、明らかに違いがありました。精神的な攻撃をする日本に比べて、ヨーロッパでは肉体的な攻撃が多く見られます。日本は、周囲にいる人々に合わせようとする傾向がある為、人との違いや多様性を受け入れようとしません。言い換えると、個人より集団の方が強いと考えているのです。このような事から、日本では虐めの傍観者が増えていています。恐怖感により虐めを止める勇気も無いのです。

日本と海外におけるいじめでの傍観者と仲介者の割合について調べました。すると、ヨーロッパに比べ日本は、傍観者の割合が非常に多いです。日本の学校ではいじめが解決するのが困難です。これらの状況を打破するために二つの解決策を考えました。一つ目は、いじめを解決しやすい環境を作ることです。例えば、匿名でのアンケートの実施です。匿名は、報告する側の心の負担も減らしてくれます。また、報告した人が誰かわからないので、その人に対するさらなるいじめを阻止することができます。二つ目は、他人の独自性を尊重することです。このことを達成するには自己表現が大事だと考えました。クラスの活動として、普段の授業以外に話し合いや発表の場を設けてみましょう。そうすることで、みんなの知らなかったことを知る機会が増え、それぞれに対する理解が深まるはずです。

いじめは決して簡単に解決できる問題ではありません。しかし、日本中の生徒のみんなが意識をすれば、少しずつ変わってくるかもしれません。まずは小さなことから、いじめをなくすために行動を起こしてみませんか？

銅賞受賞：広島女学院高校

チーム CreativeLifeProject (鬼頭伶実さん、熱田弘奈さん)

タイトル：Empowering Children to Realize their Dreams

私たちはミャンマーとネパールを訪れ、子どもたちが環境の不備や古い慣習によって自分の人生の可能性が狭められているという状況を知りました。帰国後、Creative Life Projectを結成し、現在、N×N Creative Life Projectを実行しています。このプロジェクトでは、ネパールの孤児院で生活する子どもたちが自分の意志で人生をやることのできる社会を実現することを目的とし、2つのことを行っています。1つ目は、ネパールの施設で生活する子どもたちに折り紙や玩具、文具などの子ども用品を届けることです。子どもたちは遊びを通して社会性や創造性などを身につけますが、支援先の施設では、それが十分といえる環境がなく、子どもたちはそれらの力を身につける機会を奪われています。2つ目は、彼らにオンライン授業を届けることです。自分の意志を自由に表現すること、自分の人生を創造して良いことを知らない子どもたちが多くいます。私たちが海外の文化や事例を発信することで、子どもたちが広い視野を持つきっかけを作ります。異なるバックグラウンドを持つ日本の高校生とネパールの子供たちが交流することは、お互いにとって新たな世界を切り開く一歩となります。しかし、これらの活動が私たちの独りよがりな活動にならないためにも、探究学習が必要です。チームで探究を行う理由は、アイデアがあればあるほどチャレンジ出来るが増えます。みんなで意見を言い合うことで慎重に物事を進めることができたり、一人では思いつかなかった画期的な案を見つけ、行動に移すこともできます。また、効率的に物事を進めることが出来ます。私たちは、私たち以外の人にも世界問題について自分事としてとらえてもらいたい、そして、お互いが「人」として向き合う大切さ、現地の人が未来を創るという国際支援のあり方を伝えたいので、参加したいと考えました。

Global Link賞（スポンサー賞）：カリタス女子高等学校

チーム teamMAX（沼澤咲季さん、小川理子さん、斎藤真彩さん、島村真央さん）

タイトル：Fairtrade; the New Standard

ターム留学を通して得た、自ら行動・発信することの重要性をto beで終わらせるのではなく、to doとして、この先に繋がたいという私達の志が、本コンテストが求める人物像と一致したため、参加を決断した。留学という共通の背景を持つ私達は、役割を分担し活動してきた。また、各々が持つ海外との繋がりを最大限に活用し、チーム内での情報共有も行った。私達は、フェアトレードが世界に存在するあらゆる問題を解決する手段であると確信している。多くの人にフェアトレード商品を日常に取り入れて頂くために、フェアトレードに対する認知度を高めるだけではなく、購買意欲の促進を目標に掲げて活動している。具体的には、留学で知り合った海外の友人と、私達が通う日本の高校を対象に行ったアンケートの比較・考察や、フェアトレード商品を扱う会社であるピープルツリーへのインタビューを行った。その結果や情報をもとに作成した、私達オリジナルのロゴを載せたポスターを、フェアトレード商品を扱っているスターバックスの中でも、特に顧客の年齢層が広い二子玉川公園店に貼って頂いている。また、より若い世代にフェアトレードのことを知ってもらい、商品を楽しんで欲しいと考え、ピープルツリーのフェアトレードチョコレートを1月に母校の小学校で約600個販売する。フェアトレードが当たり前になることで、SDGsの過半数の達成が可能になる。例えば、消費者と生産者間で公正な取引が行われると、商品の生産者の収入が上がる。特に生産者が多い国では、国全体の歳入が増え、結果的にSDGs10番の「人や国の不平等をなくそう」の達成に繋がる。さらにフェアトレード商品は、消費者と貧困に陥っている生産者の架け橋になる。これは深刻化が進む現代の分断社会において、重要な意味を成すだろう。このように、フェアトレードは「持続可能な世界」を実現する手段であるのだ。

一般社団法人 英語4技能・探究学習推進協会

〒108-0014

東京都港区芝5丁目1-4-13 アセント三田7階

TEL: 03-4405-3630

FAX: 03-5432-9907

MAIL: info@esibla.or.jp

Change Maker Awards

▷ <https://esibla.or.jp/change-maker-awards/>

ESIBLA教育フォーラム

▷ <https://esibla.or.jp/esibla-forum/>

一般社団法人英語4技能・探究学習推進協会HP

▷ <https://esibla.or.jp/>

探究学習白書

▷

<https://esibla.or.jp/inquiry-based-learning-white-paper/>

お気軽にお問い合わせください。